

1 カナでの婚礼

今日の箇所^{ベック}に伝えられている、カナの婚礼の席で起こったことは、婚礼という晴れやかな場面を背景に、イエス・キリストはどういう方か、それを、もつとも印象深く示した出来事の一つです。聖書はこれを、イエスが「栄光を現された」「最初のしるし」だといっています。母マリアにとつても弟子たちにとつても心に深く刻まれた最初の出来事となったのです。

場所は、故郷ガリラヤのカナです。冒頭に「三日目に」とありますが、その意味は必ずしもはっきりしません。しかしこれがイエスが宣教活動に入ってすぐのことであったことは確かです。

カナで婚礼があつて、イエスの母マリアがそこにいたとあります。マリアがここではじつさい重要な役割を果たします。イエスも、弟子たちと一緒に招かれ、参加していました。この辺の書き方から推測して、婚礼をもよおしている人と近い関係にあつたのはマリアのほうです。

宴もまさにたけなわ、そのとき、聖書によれば、宴席に欠かせないぶどう酒が切れてしまったということです。まずいことになった、私も読者もみなそう思います。ただ今回あらためて丁寧に聖書を読んでみて、ぶどう酒が足りなくなるという事態が何か非常に重大なことが起こったように書かれていないかと思つていきます(私の読み方ですが)。ただ彼女が花婿花嫁、そして婚宴を催した人たちを自分のことのように心配していることは明らかです。

ぶどう酒がなくなった(三節)。この母の言葉は、あなたの力で何とかならないかという間接的な訴えでもあつたと思ひますが、それ自身は事実を伝えたまでのことでした。この言葉の解釈として、おそらく一番ありそうもないものとして、母の言葉の意味は、息子のイエスが弟子たちも連れてきていて、それでぶどう酒が足りなくなったのだから、早く退席せよということだというのを見つけました(ベンゲル)。そうではないだろうと思ひながら少し面白いので申し上げておきます。

ぶどう酒がなくなりそうだという母マリアに対して、イエスは表面的にはたいへん冷たく応じています。「婦人よ、わたしとどんなにかかわりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません」(四節)。このイエスの対応は、今日の箇所で分かりにくい部分の一つです。イエスは、まだわたしの出番ではないと、拒否したように見えますけれども、この続きが明らかになっているように、母マリアはその答で引き下がってしまつたわけではありませんでしたし、またイエスも何もしなかつたわけではありませんでした。むしろ逆でした。母マリアは、召し使いたちに、この人が何か言いつけたら、何でもそのようにしてくださいと言っています。イエスは、当時の習慣にしたがつて(食前食後にきよめのために手を洗う)そこに置いてあつた大きな石がめ六つ、それを水でいっぱいにして、そこから汲んで、「宴会の世話役」のところに持つていくよ

うに召し使いたちに命じます。

そして召し使いたちが、イエスに言われたように汲んだ水を運んでいくと、それはすでにぶどう酒だったのです。「ぶどう酒に変わった水」（九節）という言葉が出てきますが、もう少し詳しく訳せば「ぶどう酒になっていた水」です。運ばれて来たとき、したがって宴会の世話役の人が味見をしたとき、そこに入っているのはぶどう酒以外のものではなかったのです。

事情を知らない世話役は、ぶどう酒がもってこられたことに、しかもよいぶどう酒が持つてこられたことにびっくりします。そこで花婿をほめて、だれも初めによいぶどう酒を出して、酔いがまわったところを見計らって悪いのを出すものだ、それなのにあなたはよいぶどう酒を今までとっておかれました、といってその誠実さをほめたというのです。

2 イエスと彼の母

何かこころ高められるような、明るい出来事が、いま簡単に辿っただけでも、ここにあることは確かです。そのように感じる理由は、困っていた若い花婿花嫁をイエスが助けてくださったということにあると思います。またそのきっかけをつくったマリアのことでも考えないわけにはいきません。

イエスが助けてくださった、その通りです。しかし私どもが何よりも注目しなければならぬのは、イエスが婚礼に招かれ、その席に座っておられるということではないでしょうか。

これが注目に値することであることは、バプテスマのヨハネのことを考えていただければはつきりします。ヨハネは荒野を生活の場としました。いながら野蜜を食料としていたと伝えられています。これとはまったく反対にイエスは、人の住んでいるところ、町々村々を訪れて、その生活の中で人々と触れあつたのです。なるほどそこには民の罪に汚れた生活もあつたでしょう。しかしそれを否定せず、むしろきよめ、神への奉仕へと取り上げてくださった。私どもの人間の喜びをご自分の喜びとしてその働きをはじめられたのです。そうして人となった神の子イエス・キリストの生活は始まったのです。

招かれて、それに応じて、イエスがそこに来てくださったことにも、私どもは注意したいと思います。

ヨハネによる福音書には出ていないのですが、マタイ、マルコなど他の福音書に徴税人レビがイエスの弟子になって、感謝の宴を催したことが書いてあります（マルコ二・一三以下）。イエスは喜んで招きに応じます。そこにはたくさんの徴税人仲間も来ていました。フアリサイ派の律法学者たちはそれを見て、イエスの弟子たちに、お前たちの先生は罪人や徴税人などと一緒に食事をするのかと嘲笑します。するとイエスはこういったとあります。「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」。招きに応じて席を共にするということは、そこにいる人たち

と同じになるということです。徴税人、罪人とさげすまれていた人たちと同じになるということですが。招くイエスは招かれて行ったのです。イエスは招かれて、彼らを招くのです。私どもがイエスに招かれるためにはイエスを私どもところに招かなければなりません。イエスを、私どもは招いておられるでしょうか。私どもの家に、私どももの集會に、私どもの食卓に招いておられるでしょうか。イエスは隣人や友人のように呼ばれる者となります。神はそれほどにへりくだって私どもの招きに応じて客となつてくださいます。それは神が、私どもと、私どもの喜びにも悲しみにもいつも共におられるためです。招かれたイエスはいま婚宴を祝福してください。

さて母マリアに目をとめてみましょう。(ただここではマリアという名前は出てきませんが、便宜的にマリアの名前も使います)。

ここで少し驚くのは、息子のイエスから突き放されたにもかかわらず、彼女が怒りもせず、この人が何か言いつけたら何でもそのようにしてくださいと、さっさと次の行動に移って行っていることです。

母は、イエスが神の子メシアであることを、確信していたと考えてよいと思います。ぶどう酒が足りない彼女がいったのはメシアとしてのイエスに何かするように強要しているのではない。しかし期待していることは確かです。ぶどう酒が足りないという事実は伝えなければならぬ。それは私どもの祈りと同じです。ぶどう酒が足りないということ、神の前に持ち出すのです。それを委ねるのです。聞き届けてくださる、かなえてくださるという信頼をもって持ち出すのです。その上で私どもは私どものなすべきことをしなければならぬ。母マリアがこの人が言うことは何でもしてくださいと言ったのがそれです。

イエスの一見冷たい答えもメシア・イエスへの母マリアの信頼を少しもそこなうことはなかったのです。彼女とともに私どもが目を向けるべきなのは、私どもと同じ席にイエスが共に着いておられるということです。そうであるなら、すなわち、イエス・キリストが私どもの生活の主となつておられるなら、悲観することも望みを失うこともないということです。こうして見ると母マリアのここでの姿は、私ども信仰者の一つの在り方を示しているといつてよいように思います。

3 ぶどう酒に変わった水

ぶどう酒がなくなったということをごのようにならよいか。ぶどう酒が足りなくなったことを、私は「私どもの思わぬ失敗、思わぬ困窮」と申し上げておきます。

ぶどう酒はなくてはならない婚宴の陰の主役のようなものですから、当然十分に準備していたはずだと思います。ただお金がなくて、余るほどに用意することができなかつたこともあつたようです。当時の婚宴は、場合によっては一週間もつづいたというのですから、どんなに用意しても、用意し切ることにはなかなかたいへんなことであつたと思われまふ。

いずれにせよ、宴も、半ばを過ぎていたことでしょう。足りないことが分かつたと

いうのです。予定通りにはいかない。どんなに周到に準備してもいつの場合も私どもの予測など、見事にはずれず。はじめにちよつと触れた、イエスが来ることは分かっている。弟子の人数までは読めなかった、計算が狂ったという説もあるほどです。手違いがあったり思わぬことが起こつてもくろみ通りにはいかない。ただこの場合でも、早い時間にたくさんぶどう酒が出てしまったのは、あるいはむしろ嬉しい誤算であつたのかも知れないのです。

いずれにしても、そうした私どもの思わぬ失敗、思わぬ困窮、そうしたものから私どもはだれも免れてはいません。私どもが、この世の時間の中の生を生きているかぎり、どんなりっぱな人も、どんな信仰者も、それは免れない。思わぬことであるだけに、それはいつそう私どもには腹立たしく、不愉快です。でもそれこそは私どもが人としてつねに限界の中で生きていくことです。そこに何か特別の問題があるわけではない。しかし根本的には、罪のもとにあつて、神との関係、人との関係で破れを背負っているということです。しかし主イエス・キリストは、私どもと同じテールについて、私どもの用意した蓄えがつかせてしまふまさにそこで、新しいものをもって私どもも助けてくださいます。

水がぶどう酒に変えられるというのはどういうことでしょうか。それはこの地上にあるどんなものでも、神によつて変えられて、神の栄光のために用いられるということとを意味するのではないのでしょうか。

今回、この説教を準備する中で、古代のキリスト教思想家アウグスティヌス(354430)の見解が、強くこころに残りました。こう言っています。この奇跡が神によつてなされたと知っていれば、不思議なことは何もない。というのもここでぶどう酒をつくられた神は、毎年、ぶどう酒をつくっておられるのだ。つまり雲から降り注ぐ水が同じ主によつてぶどう酒に変えられる。それは毎年のことだから何の不思議もないのだ。それはいつもなされるから驚嘆されなくなった。しかしこつちのほうが考察に値する、と(ヨハネ福音書講解)。空から降ってくる水がぶどう酒になる。それは世界をつくり世界を支配しておられる神の御わざです。神の創造と摂理によります。そうしたことへ人の思いがいなくなつたとき、神はその不思議を通して、神の業に注目させられるのです。

私どもが日々こうして生きていくことも、決して当たり前のことではない。創造と摂理の神によつて支えられている。その不思議によつて生かされている。水がぶどう酒に変わる。変わるのです。神によつて人は変わるのです。水にすぎない私どもがぶどう酒に変えられて人を生かし、お役に立つ、そうしたことがあるとしたら、それは神様の働き以外ではないのです。私どもの思わぬ失敗や困窮のときも、水を変じてぶどう酒として助けてくださる神に感謝し信頼してこの一週間も主の証人としての日々を歩んでまいりましょう。

(二〇一九年一月二〇日)